

発達障害と読み書き支援

吉川左紀子(こころの未来研究センター長)・小川詩乃(こころの未来研究センター共同研究員)

■目的

発達障害児は固有の学習困難を持つと考えられているが、その認知的な機序は明らかではなく、その支援は急務である。本プロジェクトでは、「読み書き」という切り口から、発達障害児への支援とその認知特性を検討することを目的としている。2007年からこれまで、学習に困難を持つ発達障害のある小学生(延べ31名)を対象として継続的な学習支援に取り組んできた。2010年度においては、これまでの活動を踏まえて、研究成果として社会に発信していくことを目的として、いくつかの新しい取り組みを行った。

■学習支援の体制

これまで23名の発達障害児に対し週1回の学習支援を行ってきた。その結果、読み書きを始めとする学習面での向上がみられることが分かった。一方で、週1回の支援には時間・人手などのリソースが多く必要であるため、その対象は比較的少数の児童に限られてしまう。このことは、地域での活動に本プロジェクトの方法を応用する際に制約になる。

そこで、支援の効果を維持しながらより多くの児童が参加できる体制を構築する目的で、2010年度は隔週の支援に頻度を減らしてその影響を検討した。同時に、新たに8名の小学生を月1回支援する形で受け入れた。これらの試みにより、児童への学習支援に加えて、保護者の児童理解をサポートすることの重要性が浮き彫りになってきた。発達検査などの結果を保護者に伝え、児童の学習困難に関する理解を促し、それを家庭での児童への接し方や勉強の教え方に反映できるように具体的なアドバイスを行うことが児童の支援につながると感じられた。特に、

発達療育室での支援の機会が少ない場合には、保護者の児童理解を促進することの重要性が増すと思われる。このことを検討するために、定期的に保護者への質問調査を実施し、保護者への積極的な情報提供や話し合いが児童理解にどのような効果をもつかを時系列的な変化を追うことで明らかにしたいと考えている。

■発達障害特性チャート MSPAの実施

連携研究員の船曳ら(2011)によって開発されたMSPA(Multi-dimensional Scale for PDD and ADHD)を4名の児童に実施した。本研究プロジェクトは、学習困難を抱える児童を対象としているが、参加している児童の特徴は非常に多様であり、学習困難の原因も様々である。これまでの、主に児童の認知機能に焦点を当ててきたが、学習の困難には、社会性や感情、こだわりなどより幅広い要因が影響していると考えられる。MSPAを導入することにより、これまで学習支援を行う中では捉えにくかった、ひとりひとりの子どもの認知、感情、行動の特徴をより明確に捉えることができるようになった。これにより、より児童の特徴に合った学習支援を考える有効な手掛かりが得られた。今後、本チャートの各項目の値と学習の困難さとの関係を検討していきたい。この成果の一部は、第52回日本児童青年精神医学会総会において発表した。

■自閉症スペクトラムの特性の 検討

これまで、本プロジェクトでは、読み書きの苦手さを評価する課題を実験



児童への学習支援の様子



保護者への説明とサポート

的に検討することを1つの目的としてきた。しかし、本プロジェクトの参加児童の半数以上は自閉症スペクトラムであり、それらの児童の学習困難と、自閉症スペクトラムの特性は切り離せないと考えられる。このため、行動観察に基づいて自閉症スペクトラムの対人コミュニケーション行動を評価することを試み、学習支援中の児童の表情や、離席の様子を捉えるために、ビデオカメラを新たに2台導入した。今後この内容を分析して、学習支援につなげていきたい。

■今後の展望

今後も実践としての学習支援活動を継続していくとともに、多様な視点を取り入れて支援効果の実証研究に取り組んでゆく。